

PHD LETTER

38

PEACE・HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT 1991・3

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり(Peace)健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からはじまりました。

帰国研修生報告 ネパール・タイ 4・5P
研修生レポート 3P

発行: 財団法人PHD協会
編集人: 草地 賢一
住所: 〒650神戸市中央区元町通5-4-3 元町アーバンライフ202
TEL(078)351-4892 FAX(078)351-4867
郵便振替: 神戸1-29688 財団法人ピー・エイチ・デー協会
定 価: 100円



(東北タイの農村で)

- 南 このへんはほとんど農業だけなんやけど、
乾期は水が少ないし、最近では農薬やら化学肥料やらお金がかかるし…。
- 北 それ日本からも?
- 南 それだけやのうて、他にもあんなんよ。
- 北 商売熱心、日本!
- 南 せやけど、このおばちゃん的笑顔はぜったいタイ製ね。

草の根の人々を訪ねて 交流から連帯をめざして

毎回アジア・南太平洋の草の根の人々を訪ねるレポートをしてまいりましたが今回は去る11月下旬から約3週間、1月下旬から3週間訪ねた関東、中部方面および九州、中国方面で心に残った人々のレポートを中心にしたいと存じます。そして12月上旬の韓国訪問で語り合ったことを加えたいと思います。

通称「東・西日本研修旅行」はもう7回目を迎えました。継続は力なりとはよくいったもので本当にコツコツと交流が蓄積されていることを実感したのは「PHD飛騨友の会」主催の国際交流を考える講演会でした。人口4万人の小さな暖かい町でなんと180人も多勢の方が集まって研修生と語り、また私の協力の必要性について話を聞いて下さいました。たった17、8人の友の会のメンバーが一生涯懸命呼びかけて手作りで出来た素晴らしい会合でした。

横浜寿町ではネストール君の顔が印象

的でした。海外出稼労働者のフィリピンの人々とその生活をうかがいながら、彼等がどのようななめにあつたかを詳しく聞くうちに久し振りに使える国の言葉を駆使しながら彼の思いは複雑だったことでしょう。

松戸では昨年の訪問がきっかけになり「松戸キリスト教青年ネットワーク」略称松キネットが動き始めていました。

北九州では4年目を迎えた祝町小学校との交流が子供達のみならず保護者を巻き込み、単なる親善の域から一歩踏み込んだ「なぜPHDのような協力が要るのか」を語り合う集いが盛り上がり、PTAの役員でこの交流のまとめ役のPHD会員宅にはその夜2時頃まで中核になったお母さんたちと熱っぽい国際協力論が話し合われました。その中から春のタイ・スタディーツアーへの参加者が生まれました。

筑豊も我々の交流から生まれたアジア

と筑豊に虹をかける「虹の会」や地域の商工会の若い人々、長崎では過疎の町、波佐見の農業青年との2泊3日の交流とだんだん深く大きくなってきています。

中でも西日本旅行の大きな収穫は西宮市の会員魚留さんがつないで下さった大分・耶馬溪の下郷農協訪問だったと思います。ここでの学びを通してPHDの研修の大切な点を教えられたように思います。点としてひとりひとりの篤農的な百姓の生き方を学ぶことに加え、それが面になって作りあげた自治の実践を学ぶということです。

この他にも例年のように長崎・広島での平和学習、水保・筑豊での問題学習を通してその地で「事柄」に生きる人々から生きることを学びました。



居昌農村YMCAチヨン総務らとアジア農民ネットワークについて懇談。居昌にて。

12月の韓国訪問では特に居昌YMCAのチヨン総務とアジア農民ネットワークが組まれて、農民が食についての情報を交換し、共通の課題を発見し、共同でそれを解決することのできる可能性について話し合いました。交流が相互理解を、そして連帯を生み出す一歩になりつつあるということでこのレポートを終わります。

総主宰 草地賢一



飛騨PHD友の会主催の「草の根の国際交流を考える講演会」。200人近い人が集まった、高山市市民会館にて。

私もちよつと 世界を斬る!

割りばし論争から学んだ事

芝 美代子(兵庫県三木市 主婦)

昨年から今年にかけて、私は新聞雑誌等に掲載される割りばし論争を非常に興味を持って見てきた。自然破壊の一端として割りばし追放運動が各地で起こるかと思えば、間伐材、端材の有効利用だと声高な反論あり。そうこうする内に竹製の割りばしが脚光を浴びたり、果ては日本独自の文化だという擁護論も登場。追

放運動の方も最近、ライフスタイルの見直しという精神運動に変化している。

この様に百家争鳴の如き論争は、生産現場(国内外の)が見えない消費者である私達を大いに迷わせたが、ある意味で世の中の流れや仕組みを考えさせられる契機でもあった。即ち産業社会の利益構造を垣間見るようであり、又短絡的であるが湾岸戦争における多国籍軍やイラク軍の戦果発表に通ずるものを感じるからである。

しかしここで私達が考えなくてはならない事は、地球環境保護という根源的問題をどう捉えるかという事だと思ふ。この捉え方いかんで自ずと選択する道が決まってくる。

ちなみに私自身に限れば、この割りばし論争をきっかけに使い捨て商品への波状的連鎖反応が、ポスト割りばし論争になるのを期待すると同時に、地球環境保護へ連動するような生活行動をとっていきたく思っている。

研・修・生・レ・ポ・一・ト

日本での1年間の研修もいよいよ佳境にはいつてきた8期1班の研修生たち。11月~12月にかけて、恒例の東日本研修旅行にて出かけました。6度目となるこの旅行では、今年も多くのお会いがあり交流が深められました。初めての訪問先も岐阜県中部女子短大、愛知教育大、横須賀小川町教会、川崎市長沢中学校、高崎YMCA、群馬の社会福祉法人新生会、東京の立教女学院、自動車総連本部、富士市吉原工業高校及び浜松、松本、金沢、静岡県大東町、福井の市民グループと枚挙にいとまがありません。こうした地道な交流の広がり、PHDを支えて下さっている全国の方々の熱意と努力によって実現しました。1月~2月にかけての西日本研修旅行では、西南女学院中学校、西南学院中学校、福岡中部教会、福岡地区協議会、北九州、広島、岡山県和気町の市民グループの方々とお目にかかることができました。



下郷の開拓入植部落鎌城地区で、左側が市村常務。

この東・西日本研修旅行も今年で7回目を数えますが、今年初めて訪れた大分県下郷農協と例年お伺いする水保での出会いと学びについて印象に残ったことをお伝えします。大分下郷農協は耶馬溪のふところに抱かれた風光明媚な谷あいにあります。地域の中での農業協同組合の働きを学ぶ目的で見学しました。この組合の実践は、市村常務の「農民が主人公の農協」という一言に集約されていました。減反と米の輸入自由化という二重の風当たりの中で下郷農協は一度も減反政策を受け入れていません。農家の人々が安全に作った農畜産物が農協を介して都市の消費者とのすばらしいコミュニケーションの中で直販されています。この日の夜は長野県から戦後、開拓入植された鎌城地区の方々とは百姓交流。すきとくわを手で荒地を切り拓いた当時のお話が、パプア・ニューギニアの現状と重なって大いに盛り上がり、話は夜遅くまで続き



水保病を自給的な農業の実践を通して克服された田上義春さん(右3番目)の話をきく研修生。右端は今回水保での研修をビデオに収録された鬼塚巖さん。

ました。水保では、研修生の学習を鬼塚巖さん(「おるが水保」を86年、現代書館から出版)が終始ビデオに収めて下さいました。水保病の歴史と被害の状況、そしてその克服に現場で闘う人々との交わりは、3人の研修生にとって生涯忘れる事のできないものとなったでしょう。今まで見た事のない日本の現状に触れた研修生の目の輝きが印象的でした。最後にチッソに就業していた加害者として、また水保に生きる被害者として水保病を追い続けている鬼塚さんの優しさに溢れたお話を、水保病の発端となった湯堂湾で聞く事ができました。(鬼塚さんによって撮影・編集された水保学習のビデオが、早速PHD事務所へ送られてきました。ご覧になられた方はPHD迄お問い合わせ下さい)

東日本研修旅行

1990年11月14日~12月5日
近江八幡市~彦根市~関市~刈谷市~豊田市~横須賀市~鎌倉市~逗子市~川崎市~柏市~船橋市~高崎市~榛名町~東京~松戸市~甲府市~富士市~静岡~大東市~浜松市~飯田市~松本市~高山市~金沢市~敦賀市~和歌山市

西日本研修旅行

1991年1月20日~2月10日
北九州市~庄内町~金田町~大分耶馬溪町~福岡市~熊本市~水保町~長崎市~波佐見町~広島市~上下町~庄原町~三次町~倉敷市~和気町~山陽町~岡山市

さて、ヘルベさん、レルさん、ネストールさんの農業研修も後半に入り、的が絞られてきました。ヘルベさんは、今後の課題として農協のしくみ、特に営農指導を掲げ、黒田庄農協で研修を行います。

1月には中野宗嗣さん(春日町)から山を守ることの大切さを木の切り出し作業を通じ学びました。

また、レルさんは、大森昌也さん(和田山町)の所で文字通り雪まみれになりながら適正技術としての「炭焼き」の実習をしました。これまで3・4日かけて山から切り出し、燃やしていたが、炭焼き小屋を作り、炭を焼くことで、村の人々にも役立つ研修ができたレルさん



和田山町で炭焼きの実習に励むレルさん。

も喜んでいました。彼の課題は米づくりと植林。これから春にかけてが研修の本番になります。ネストールさんは、渡辺省悟さん(丹南町)の所で養鶏を中心にしながら有機農業のしくみを学びました。土づくりの作業、また輪作の考え方が大変参考になったようです。ネストールさんの課題は、植林と有機農業の実践に加えてグループづくり。後半の研修の成果が期待されます。

「不思議の国のサムスアリスさん」



神戸のお母さん、芝川恵子さんとサムスアリスさん。

「はじめはどんな食物が口に合うかという事に苦労しましたが、だんだん私達の食事に慣れてくれました。彼を受け入れて、いかに日本が浪費しているかを教えられた気がします。」と芝川恵子お母さん。日本語学習の期間、西宮の芝川さんのお宅にお世話になりました。電車で三宮から西宮へいつもなら20分のところを5時間さまよい、まわりはハラハラドキドキ。村で1日3箱吸っていたタバコを、物価の高い日本ではエコー2箱でガマンのサムさん。健康のため、もっと減らしたら?

第7回 ネパール フォローアップ & スタディ ツアー 報告

2年ぶりのネパールツアー。82~84年に来日した初期の研修生を訪ねる旅。ネパール内では飛行機の子約が入ってなかったり、暗くなって飛ばなかったり、霧で遅れたり日程はくるいでしたが、全体でポカラに、その後3班にわかれ村に滞在しました。ピスタ、アマティア(1期)ラダ、サヒ、サンバ、アディカリ(2班)ガウチャン(3班)さん、みんな日本語で迎えてくれました。

コース 91.1.4~1.13 9泊10日 15名参加
大阪→バンコク→カトマンズ→ポカラ→班にわかれ村→カトマンズ→バンコク→大阪

「くらし見直しの旅」

渡辺昌美 (主婦、研修指導家庭) 兵庫県丹南町

8年前、第1期生のピスタさんを受入れた。覚えていてくれるだろうかとの心配をよそに、出迎えをうけ感激でした。ツアーに加わって、実際に目で見て、ふれてみなければわからないことがたくさんあり勉強になりました。日本が近代化を叫んで突走ってきた30年の道程の途中に、先人があたたか、はぐくんできた人情や責任感、物を大切にすること、そして農業の価値と重要性、森林の恵み等大切なものを忘れてきたのではないかと反省もさせられました。

「セーターがつなが交流」

岩佐美紀 (家事手伝い、研修指導家庭) 姫路市

数年ぶりに会ったラダさんは年をとり小さくなったように感じた。彼女の編物指導は家の庭で毎日行われている。集る人たちは生活が楽でない女性たちが殆んどで、字が読み書きできない人もいます。グループで年間150枚程のセーターを編みその1/3を私のところと下関に送ってもらいバザーで売っている。日本での研修の後も本を送ったり、助言を続け、彼女のセーターはネパールのお店のものと比較してその差がわかる。母親が亡くなり、上の娘も嫁ぎ、主婦としての仕事も多いがこれからも女性の生活のために頑張ってくれるだろう。

「山の学校で会った少女」

西村小枝子 (大学生、西宮市)

マハンカラの村の2日目、ピスタさんの案内で山の学校にでかけた。同行の保健婦サラスティさんが、ひとりの少女の顔をなぜ「この娘の家族は、このまへの洪水で死にました」と話した。小高いところにある学校から下をみるとその洪水の跡が目に入った。どんなに悲しかったろう。泣いてはいけないと思ったがその少女の美しい眼をみると、耐えられなかった。

ネパールの村ではコンロをひねれば、火がつくという訳にはいかない。煮炊きは木だ。耕地も少なく、山に段々畑を切り開かねばならない。木を失った山は大雨が降ると災害をもたらしてしまう。外国の木を切り、無駄使いをしている私は幸せに暮らし、生きるために木を切る少女は家族を失った。土砂で埋った畑の間を重い気持ちで歩いた。

「村の共同作業の日は学校休み」

大西延枝 (主婦、加古川市)

アディカリさんの活動するチョータラでのとりくみの話をきいた。トイレや水道づくり、豚やヤギの飼育、読み書きの指導、生活改善のためのグループづくりなどたくさんの方にとりくんでいる。実際に村をまわった際にも水路工事をしている現場を見た。10~20才の男女が素足でドロにまみれて作業をしていたがどの子もごく当然という表情をしていたのが印象的だった。



マグワ村で水路工事に加わる子供たち。

「良き指導者としてがんばって」

原一男・千代子 (靴下製造、加古川市)

研修生やその家族の人たち、とっても素晴らしい人たちに会えて幸せでした。彼らの、モノよりも知識を願っている様子、奉仕精神に感動しました。

「私の考えた村の改善策」

丸山陽子 (主婦、加古川市)

サンバさんに連れられてカトマンズ近郊の農村をまわった。そこでは衛生状態が良くないのに気づき、私なりに方法を考えてみた。

水道はあるが、排水路がないので全体にジメジメしている。排水路を作り、村にあるタメ池に流すようにすれば、改善されるだろう。村人の協同作業でお金がなくてもできるはずだ。

「私はネパールで考えた」

田中裕美 (大学生、西宮市)

この4月から社会人だけど、こんどの経験は私の将来に大きな影響を与えるだろうと思う。いろんなことを考えたけれど、この経験から日本人に今、必要な事は

- 1.日本もアジアだという意識
- 2.援助をするのなら、現地の人々が最も必要とすることを
- 3.他の人への関心
- 4.オヤジ、オバハン、クソガキ(日本にや取り澄した人が多い)
- 5.心にゆとりを(24時間も働かなくてよる以上)

「バレーボールで負けてもた」

大西真一郎 (小学生、加古川市)

ネパールの子どもたちといっしょにあそびました。ネパールの子は体力がたくさんあり、すばしっこく、たくましく、元気でした。

「お茶のとき…。」

馬場寛子 (広島県上下町)

マグワという山の村で私は岩佐さんと二人で一軒の家にお世話になることになった。家につくと、お茶をだしてくれた。お茶といってもお湯に砂糖を入れただけなんだけどとてもオイシイ。熱々をそのままコップにつぐので熱くて持てない。「困ったなー、どーやって飲もうか」と考えていると、子供が紙を破って渡してくれた。コップに巻くというのだ。言葉が解んなくても通じるものなんだよね。すごく嬉しいんだよね。こーゆーのって。

第5回 タイ フォローアップ & スタディ ツアー 報告

年末はタイの村。ここ数年のPHDのツアーです。今回ははじめて東北タイの村もコースとしました。東北タイ、北タイと夜行バスの移動も含めた強行軍でしたが、ワラヤ(6期)、サンコム(7期)、バムルン(7期)、プリチャー(3期)、コマ(4期)さんたち、そして村の人たちに暖かく迎えられ、いい旅になりました。

コース 90.12.23~12.31 8泊9日 14名参加
大阪→バンコク→コンケン→カラシン県→チェンマイ→カレンの村→チェンマイ→大阪

「おおもて！」

竹垣大介 (高校生、神戸市)

イサーンの村に泊った2日目の夜、近所で結婚式の前祝いにでかけた。そのときに19才の女の人に好かれてしまった。言葉が分からないのでひたすら笑顔で微笑みだけ。これで余計に好かれてしまうという大変な事になった。日本であまりもなかった俺がこの村で予想以上にもてたというのか、珍しがられたというのか、わからんけど実に素晴らしいところであった。

「言うは易し、行は…」

米田祝子 (島根県八束村 保健婦)

村に滞在中、だしていただいた食事からの推測だが、料理の品数も限られているし、その材料も少ない。村の人々の健康を考えるにあたって「バランス良く食べましょう」ということは簡単だがそのためには食べるものを育てること、また売って現金収入が得られる作物を作ること、それ以前には土地改良がある、一足とびには解決しない。

日本では当たり前と思っていたことがタイでは大変な努力を要したり、貴重なものであったりした。健康は人々の生活の中で築かれていくべきものであり、外部から簡単に手が差しのべられるものでないことを痛感し、だからこそ研修生をはじめとした村の人々のとりくみが大切だと痛感した。

「着実な歩み」

田中五郎 (農業、研修指導) 兵庫県波賀町

4年続けてツアーに参加し、村を訪れ

てきた。日常の生活はあまりかわっていないようだが、研修生のとりくみを通して、村人はグループをつくり前進をしていると感じた。それはコマ君の母栽培やグループづくり、プリチャー君の野菜づくりであり、さらに彼が手伝う婦人たちの布づくりである。

東北タイの村からカレンの村まで同行してくれたワラヤさんの目にも、これらのとりくみは刺激になったようで、自分の村に帰る際、苺の苗をわけてもらい荷物の中にしまっていたのが印象的だった。

東北タイでは農家の協同組織による養豚の一貫経営をみた。PHDが世話したワラヤ、サンコム、バムルンさんたちが加わっている。協同組織により中間経費を削減し、生産費を下げ、生産者の手取りを増やすことをめざしている。この活動を心よく思わない人たちもいて、楽な道のりではないと思うが、がんばってほしい。



バムルンさんの家でタイの伝統楽器ケンをきかせてもらった。

「大きくみえたコマさん」

松岡ゆう子 (研修生滞在家庭、芦屋市)

ボッケオ村で旧友のコマさんに会えました。村での彼はひとまわりもふたまわりも大きくみえました。村一帯に苺畑が広がっており、これも彼の指導によるものとか。彼と話しをしていて、彼の頭の中は何でも村のこと中心に考えていることがわかってきました。村のために努力し、献身的にとりくむ彼をみてうらやましくなりました。

「白い運動場は？」

逸見広心 (協会職員)

ツンと甘酸っぱい酸酵臭。どこまでも続く赤い土と青い空の中、村への道中点在する白い運動場でいつもにおった。何なのだろう？2日後、再び村から移動中解明。その日森林破壊の様子一見済限りの森林焼滅後とその跡地のキャッサバ

畑になっている山を見学。このキャッサバは先進国の家畜の資料と化すとのこと。そして白い運動場に見えた場所はキャッサバの乾燥場だったのだ。

「子供も働いている！」

佐瀬界平 (中学生、藤沢市)

コンケンの空港からバスで何時間か行くとやっと村につく。村に行くときちゅうにガソリンスタンドがあった。そこではまだ10才にもならないぐらいの子と14才ぐらいの子供が働いていた。日本ではふつう考えられないことだけどタイではそんなにめずらしくない。ここでもタイと日本の生活のちがいを感じた。

「笑顔がいっぱい」

菊池由恵 (大学生、豊中市)

単語とジェスチャーの会話にならぬ会話。わかりたい、わかってもらいたいという気持ちがあれば何とか伝えることができる。どーにもならないこともあったけど、何かなんだかわからないうちに大爆笑になったり、リアクションが妙にウケたり、いつも笑顔がいっぱいだった。私がうけた感動を村の人たちも感じてくれたら嬉しいのだけだ…。

「日本がいい？」

松岡ゆう子 (高校生、兵庫県福崎町)

日本に帰ってきて、いろいろな人から「日本の方がいいだろう？」と質問されましたが、私はそうは思いません。人と人の交流が少なくなり、人間が自然に支えられている事を忘れてしまっている日本が必ずしも良いとは思いません。

「村の人から元気の素をもらいました」

広岡百絵 (高校生、研修生滞在家庭) 兵庫県福崎町

ムシキ村で泊ったディポーさんの家には3人の子供がいる。3人ともよく家の手伝いをしていて、7才の子も水くみをしていただけ、日本で7才の子が手伝う仕事なんかあるかなって思った。一緒に折紙をしたとき、教えてあげるつもりが逆になってしまった。行く前に練習したのにナア…トホホ。

第9期 研修生紹介



サウェー・ムアンチャン
(35才)
タイ、カラシン県
ナター村出身
農業技術全般
協同組合運営

ワラヤ、サンコムさんの村から3人目。根つからの百姓。大人しいどっしりした印象、2才年上の奥さんはサンコム君のお姉さん。子供二人。



ジャネット・パテルナ
(21才)
フィリピン、ネグロス島
パニケ村出身
保育・保健全般

7人兄妹の長女。末っ子は昨年春誕生。ドミー、ネストールに続いて三人目。両親は熱心なカサマ(南ネグロス小農民協会)のメンバー。



ナンダナ・ペマシリ
(21才)
スリランカ、
ポヤワラーナ村出身
農業技術全般
協同組合運営

ポヤワラーナ村長の推薦によってアジャンタ君について選考。高校が終ったばかり。ひたむきさが感じられる好青年で成長が期待される。



ラーニー・サイロン
(26才)
バプアニューギニア
ワリンカイ村出身
農業技術全般
協同組合・女性グループ運営

村一番のインテリの一人。村では珍しい高卒。教会、村の女性グループのリーダー。ヘルベさんの生徒だけあって畑は大変美しい。



カレンの村の“造型”

PHDの事務所でタイの布に出会い、ぜひその布を織った人たちに会いたいと昨年暮れのスタディツアーに参加した。ムシキー村での夜、グループの女性たちとの会合があり、全部で50人程が集った。ランプのあかりのもと、話し合いは2時間余りに及んだ。通訳は研修生のブリチャーさんと、他の村から同行してくれたコマさん、ワラヤさんがしてくれた。日本から草木染植物図鑑を持参し、それをみながらの話し合い。植物名がタイ語カレン語なので、図鑑があまり役に立たなかった。

農閑期、村の婦人たちが集って草や木の皮を煮、そして糸を染める。その糸を各家庭にもちかえて織るのである。手をかけて作られたものは大量生産のものにはない作り手の心のやさしさが込められているように思うのは私だけではないだろう。

現代の我国の消費文化の中で私たちが忘れかけている人間にとって最も根源的な「造形」の意味を私はこのカレン、ムシキー村の婦人による草木染手織の布を通して学ぶことができたように思う。

大谷恵子
(頤栄短期大学 助教授
明石市)第5回タイ
スタディツアー参加



大谷さん画

PHD NEWS

〈会費・御寄付寄託状況〉

1990年11月 83件 2,231,683円
12月 690件 8,466,481円
1991年1月 336件 3,113,550円

計 1,109件 13,811,714円
以上の通り、多くの皆様より会費と御寄付を頂戴致しました。ご協力いただき深く感謝申し上げます。

〈カメラを探しています〉

PHDでは研修記録用にカメラを研修生に貸与しています。現在研修生の4名に加え、4月に9期生が加わるため、事務所のカメラも全機出動中。もし御家庭に眠っているコンパクトカメラがございましたら事務所まで御一報下さい。

〈91年度前半スタディツアー予定〉

現在、詳しい日程は調整中ですが、下記の時期に計画をしています。お早目にお問合わせ下さい。

1. フィリピン・ラダナ
●5月中旬1週間●ルソン島ラダナ州●第1・2期研修生を訪ねる旅●費用/約13万円●募集/数名
2. フィリピン・ガバルドン〜ネグロス
●6月中旬から2週間●ルソン島ヌエバエシーハ州〜ネグロス西州●第8期研修生のフィリピン比較研修に同行●費用/16万円●募集/数名
3. スリランカ
●7月初旬10日間●スリランカ中部農村●帰国研修生を訪ねる●費用/約25万円●募集/数名
4. バプア・ニューギニア
●8月中旬2週間●バプアニューギニア沿岸部●帰国研修生を訪ねる●費用/約50万円●募集/数名
5. 〈第2回保育者のための第3世界スタディツアー〉
●6月下旬2週間●フィリピン・ネグロス島 ●費用/15万円前後●募集/数名

○月×日のPHD

総主事・草地 ちまたに多くの女性ファンをもつと噂されたが、事務所で確認の限りではバレンタインデーのチョコレートは2個にとどまる。義理が否かは不明。
主事・藤野 年末年始、スタディツアーの引率で、タイ、ネパールへ。海外出張

の恒例行事は現地での散髪。言葉が通じず座って終りを待つ間のスリルは30パーツ(160円)。

主事補・中尾 3人の専門学校の女子学生が企業実習としてPHDに。妙にとかやほりというか元氣一杯、バリバリと仕事はかどる中尾です。

囑託・逸見 西日本研修旅行のコースで地元岡山に凱旋。倉敷から岡山へ車で移動中道に迷うも、地元の強味を發揮と思いきや道路地図とニラメツコ。株落とす。

囑託・加藤 東日本研修旅行の道中、本隊と分かれ一人で浜松へ。タイの布の話を中心に熱弁をふるう。甲斐あって、初めての方が会員となりニコニコ。



編集後記

自分とPHDの出会いは高校卒業した年の初夏、自分の高校の先生からPHDの職員へ転身した中尾センセをたずねた事から始まった。PHD運動のなんたるかも知らずにふみ入れたるあやしげな事務所。しかし、そこにいた人たちは、暖かく迎えてくれた。そして、夏の草生塾に参加した事で、自分自身の小さすぎた考えは

大きく変化した様に思う。自分自身の小さい世界を、もっと広い考えを持つ人の話を聞いたり、その人の世界へ飛び込んだりして広げ、自分はもっと大きくなりたい。

PHDには、自分を大きくしてくれそうなネタが、そこいらじゅうにゴロゴロとひるねしているじゃありませんか!!研修生の人たちとの会話、農家滞在、Indojati、そして、忘れてならないのが出入りする人たちとの交わり。その上、今年は十周年にあたり、自分を大きくしてくれそうなイベントが目白押し。これを利用しな

い手はない。今回、レターの編集にかかわったのもそのひとつ。

PHDレターをお読みの皆さんも一度、事務所まで足をのばしてみませんか。事務所に入る勇気がないとおっしゃられる方、その心配は無用ですよ。その心配の倍以上のあたたかさをもって迎え入れてくれる所ですから。

チョッパー・コジマ

〈編集メンバー〉
赤松恵美子 今出敏彦 柿原登志夫 木村浩二
児島章一 崎本優子 芝美代子 中島千絵
中山貴美 東真由美 樋口雅一

新規会員・寄付者ご芳名は、 個人情報保護のため 掲載しておりません。

新規会員・寄付者ご芳名は、
個人情報保護のため
掲載しておりません。